

あとがきにかえて

日蓮宗現代宗教研究所 主任 高 佐 宣 長

第十二回日蓮宗化学研究発表大会は、平成二十三年十一月九日、日蓮宗宗務院で開催されました。この小冊子は、当日の発表内容を収録したものです。

「宗報」平成二十三年八月号掲載の発表者の募集には左のように記しました。

平成二十三年三月十一日、この日は、長く私たちの記憶に刻まれることになりました。

未曾有の国難とも言われる東日本大震災によって、本宗の布教教化の在り方も問い直される事態に至っているかと申せましようか。

本年四月、宗門運動「立正安国・お題目結縁運動」は、第二期育成活動に入りました。緊急活動項目として、災害復興支援活動が加えられ、一層の内容の充実が計られつつありながら、大震災後の状況にあつて、改めて何を為すべきかに若干の戸惑いを覚えてはしなないでしょうか。

さて、周知の通り、『立正安国論』は、正嘉元年（一二五七）八月二十三日の鎌倉大地震が直接の述作動機となったとされています（「正嘉元年太歳丁巳八月廿三日戌亥之剋の大地震を見て之を勘ふ」〔「安国論奥書」〕）。

左記の通り、第十二回日蓮宗「教化学研究発表大会」を開催致します。

祖師が正嘉の大地震を『立正安国論』の契機とされ、真の衆生済度への方途を開かれた如く、東日本大震災を

平成の立正安国への一大契機とすべく、現代の日蓮宗「教化学」の確立を目指したいと考えます。ふるって御発
表ください。

合掌

東日本大震災以降、宗教、佛教が改めて注目されています。宗教、佛教の意義の再確認、再評価、ということでもありますが、実践宗教としての佛教の問い直しが行われようとしているのだと言えましょう。そして、それは当然、教化学の存立の基盤を問うものでもある筈です。

この大会も、震災と教化学といったテーマを掲げて、特別な大会とする選択もあり得たのかもしれませんが、しかし、一つには、震災で提起された問題は、大会開催時点で研究発表の形にまで消化するには、余りにも深刻であり、余りにも多岐にわたる、とも思われたことから、特にそうした銘を打つことは致しませんでした。

また、震災の後は、すべからくに自粛という空気になり、特別大会にして発表者定員も増やす、というような企画とはなりませんでした。

むしろ、第十二回大会を特長づけているのは、海外布教、海外開教についての発表であると言えましょうか。

これは、三原正資所長が、平成二十二年十一月、第一回国際布教師研修会での講師を務めるため、米国の開放布教センター（平井智親所長・当時）を訪れたことを契機とし、海外布教への関心を深め、人脈を広げられたことなどによるものです。

特別発表は、平成二十三年四月より現宗研嘱託にも御就任頂いたイタリア新開教地担当開教師のタラビーニ勝亮師、また、「私から見たアメリカ開教事情」を御発表頂いたネバダ日蓮佛教観音寺寺庭婦人金井久美子氏は、申すまでもなく、北米開教区長である金井照海師の御令室です。

タラビーニ勝亮師は、ヨーロッパとりわけイタリア、アレッサンドリア県を中心に活躍されており、本年には「弘法山蓮光寺」の開堂式を執り行うなど、精力的に布教教化に勤めておられます。

現宗研の囑託になって頂いたのを機に、「ヨーロッパにおける日蓮宗の開教事情について」イタリアを中心に」と題して、ヨーロッパにおける佛敎界の現状、活動について御報告頂きました。是非御一読ください。

「教化学研究発表大会」は、日蓮宗「教化学」の確立を目指し、共々に精進する場であり、本宗敎師はもちろん、寺族、檀信徒にも発表の門戸を開いております。

本誌を御高覧頂いた皆さんの、次回大会への御参加を御期待申し上げます。

東日本大震災は、心の復権の契機となりつつあるようにも見えますが、敎学、教化学について、根源的な問い直しを迫るものであるようにも思えます。教化学研究発表大会が、日蓮門下として、この問いにどう応えて行くのかを、真摯に考究して行く場の一つとなつて行けば、と考えます。